〈実践報告〉

国語科における写真教材化の可能性を探る

――写真を用いて多様な読みを目指す授業の試み――

王　培

1　学習指導要領における写真の扱いの問題

写真を使って作文を書いたり、写真をスクリーンに映して発表したりする活動が取り入れられるなど、国語科の授業で写真を扱うことは多い。写真を扱う場合に、写真を見て、適切な言葉を選んで話したり書いたりする活動の中では、写真は単に目にして終わるものではなく、目にした内容を理解して言葉で表現する。それは文章を読む過程と同じである。写真は見るものだけではなく、読む対象にもなる。しかしながら、写真を本格的な教材として導入した国語科授業の実践を目にすることは、決して多くはない。

学習指導要領においては、写真はどのような扱いになっているのだろうか。ここでは後に紹介する実践で対象校種とした中学校について確認することにしたい。平成29年版中学校学習指導要領（国語）には、「読むこと」の各学年の言語活動例として「ウ　学校図書館などを利用し、多様な情報を得て考えたことなどを報告したり資料にまとめたりする活動。」（第1学年）、「ウ　本や新聞、インターネットなどから集めた情報を活用し、出典を明らかにしながら、考えたことなどを説明したり提案したりする活動。」（第2学年）、「ウ　実用的な文章を読み、実生活への生かし方を考える活動。」（第3学年）がそれぞれ掲げられている。本や新聞、インターネットからの情報が媒体として取り上げられている。しかしながら、これらの媒体には必ず写真が存在しているにも関わらず、写真に関する言及は見られない。

羽田[1]は、「写真を読むという学習」は学習指導要領圏外の言語活動は、国語科の授業の中で、学習者に強く意識される機会がなかった。国語科は、文章を読む教材として、写真は、学習目的としては、補助的に使用されてきたのである。（中略）写真の読みも文章のそれと同じように、見えるものとその意味の2段階読解である。ただ、

文章と違い、見えるものを言葉にしていく作業が生じる。」と述べて、「写真を読む」ことを「学習指導要領圏外」として把握しつつ、「読むこと」の学びと写真との関連に言及している。

平成29年版中学校学習指導要領解説（国語編）には、情報の扱い方に関する事項として、「急速に情報化が進展する社会において、様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり、情報同士の関係をわかりやすく整理したり、発信したい情報を様々な手段で表現したりすることが求められている。」と、主に話や文章に含まれている情報の扱い方に関する文言が見られる。しかし、高度情報化が急速に進展した現代社会においては、Twitter、Facebook、InstagramなどのSNSをはじめ、インターネット環境や学習者の実際生活の周りに文字だけではなく、常に写真が溢れており、学習者を取り巻く環境には写真が欠かせないのが現状である。にもかかわらず、写真を目にした学習者が、それをどのように受け止めてどのような読みが生まれるかについて、学習指導要領では明確に位置付けられていない。そこで筆者は学習者の現実を勘案したうえで、写真を読んで解釈することの重要性を確認したうえで、写真を扱うという活動に主眼を置く授業を構想し、実践を試みることにした。本稿ではその実践を紹介し、考察を加えることにしたい。

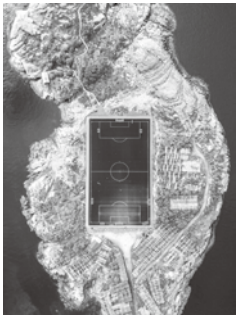
2　「読み解きのズレ」を生じさせる教材

国語科教育の分野では、写真を教材として扱った研究として、鹿内信善をはじめとする「看図アプローチ」に関連する研究が挙げられる。看図アプローチに基づく看図作文に関する研究では、写真や絵図などの非連続型のテキストが扱われている。またメディア・リテラシー教育に注目している奥泉香によれば、写真、グラフや絵図など「見るもの」として位置付けられていた非連続型テキストは「ビジュアルテキスト」と呼ばれている。近年、「見るもの」だけではなく「読むもの」としてビジュアルテキストを取り上げられつつ、ビジュアル・リテラシーという学力も注目されつつある。

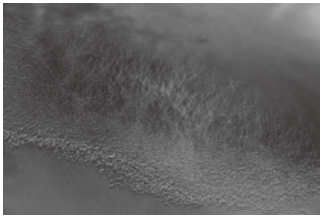
ビジュアルテキストとビジュアル・リテラシーの観点を取り入れて、鹿内は協同学習の授業実践を行った。[2] 授業実践を通して鹿内は、「読み解きのズレが活発な討論を引き起こします。また、活発な討論によって、それまで自分が見落としていたことなどもわかってきます。さらに、学習者同士の読解結果を共有することで、自分ひとりでは成し得なかった豊かな学習も可能になってきます。」と述べている。写真を使って豊かな学習効果が得られるには「読み解きのズレ」を学習者に体験させることが重要なポイントとなる。今回の授業では写真を教材にして「読み解きのズレ」を学習者に認識させて多様な読みが生まれる授業を通して、豊かな学習体験を実感させることを目的とした。

授業で使用する写真は、ナショナルジオグラフィックトラベル写真コンテスト[3]の入選作である。２０１７年から２０１９年までの入選作から今回の授業で使う１０枚の写真を選んで３部の学習活動に分けて授業を構想した。

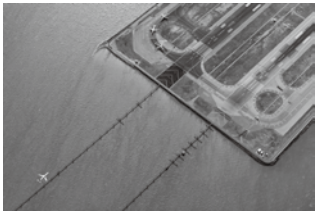
第1部学習活動の写真（1）



第2部学習活動の写真（2）



第3部学習活動の写真8枚



注：上から順番で3―1、3―2、3―3

注：右上から順番で3―4、3―5、3―6、3―7、3―8

写真を教材として選定するに当たって、筆者は一つ大きな基準を設けることにした。それは学習者が写真を初めて見る際に「そ

れは何?」という疑問を抱くように工夫することである。学習者に疑問を生じさせるためには、写真の内容にある種の「わかりにくさ」が必要である。教科書の中でも挿絵として絵図や写真などのビジュアルテキストがよく使われていて、学習者にとってビジュアルテキスト自体は珍しいものではない。しかし、その大半は文章テキストを理解するための補助手段として用いられている。つまり、「見てわかる」ことが優先されている。その「見てわかる」を目的にして使われていたビジュアルテキストは受動的な学習を引き起こす危険性があると、鹿内（２０１５）は警鐘を鳴らしていた。教材となる写真の選択には、「見てわかる」のではなく、「見てわかりにくい」という要素が含まれている内容が必要だと考えている。鹿内[4]は以下のように述べている。

ビジュアルテキストでも文章テキストでも、ある種の「わかりにくさ」を備えている必要があります。学習者たちは、その「わかりにくさ」に直面して、協同の学びを始めていくのです。そして、個々人の「わかり方」を共有しながら学び合いを深め、自分たちの力で「わかって」いくのです。必要なのはある種の「わかりにくさ」なのです。

今回の授業ではある種の「わかりにくさ」を設けることを基準にして教材とする写真を選んだ。「わかりにくさ」を備えている写真を学習者に提示する際に、学習者が疑問を抱き、疑問を抱いている学習者同士が学習活動に参加し、お互いの疑問を共有したりぶつかったり、その過程でお互いの読み解きのズレが生じたり緩和したりすることになる。それらの活動は能動的な学習につながり、そこから多様な読みが生まれると考えられる。そこで筆者は今回の授業で使う写真を選ぶに際して、先述した基準と授業構想を用いることにしたうえで、写真や絵図に深く関わる業務に携わる建築デザイナー[5]と相談して一緒に写真を選定することにした。

3　授業の展開（全1時間30分）

ここで紹介する授業は中学生を対象校種として構想したものだが、実際の授業は大学2年生および3年生を中心とした「国語表現論」の授業において実践することになった。以下に授業の実際を略述することにしたい。

(1) 学習目標

・写真を見て、情報を読み取って写真の内容を推測できる。
・推測して想像した内容を言葉にして話したり書いたりすることができる。
・グループ活動に積極的に参加する。
・自分の意見や考えを論理的に分析し、根拠をもって理由を考えて記述できる。
・他人の考えを参考にして自分の考えを広げる。

(2) 学習者

早稲田大学教育学部国語表現論Ｂの学部受講生計31名。

(3) 授業展開

授業の展開は大きく3部構成となっている。

第1部は導入として写真1を教材として使用する。

学習活動（1） 写真1を見て、写真の内容を推測する。どのような被写体を撮影した写真かを想像してワークシートに記入する。その推測した内容をクラス内で共有する。これは、学習者に写真を扱う授業に慣れさせるための導入活動として位置付ける。

第2部は1枚の写真2を使って内容を推測して、そのように判断した根拠を考えて、グループ内で討論することにした。第2部の学習活動は次の（2）から（5）のように、4段階に分けて展開した。

学習活動（2） 写真2を見て、写真の内容を推測して、その根拠を考える。

学習活動（3） グループに分けて、どのような写真かという点について判断した根拠をグループ内で討論する。

学習活動（4） グループでの話し合いを通して考えた自分の主張と根拠を、ワークシートに書いてまとめる。

学習活動（5） 各グループの発表を教室内で共有する。

続く第3部では複数の写真を用いることになる。第3部の学習活動は次の（6）（7）の2段階に分けて行う。

学習活動（6） 写真3―1、3―2、3―3は同じジャンルで受賞した作品である。3―4、3―5、3―6、3―7、3―8から1枚を選んで、その3枚と並べるとしたら、どの写真にするか、その理由を考える。さらに、4枚の写真のテーマを考えて、その理由とともにワークシートにまとめる。

学習活動（7） 考えた内容をグループ内で共有する。

学習活動（8） 授業の感想をまとめる。

4　授業の実際と学習者の反応

第1部は授業の導入として、今回の授業の趣旨の紹介を含めて5分間程度で行った。学習者は写真に目を向けて、積極的に授業に参加する様子が見受けられた。

第2部の学習活動を通して、学習者から提出されたワークシートに回答をまとめることとなった。以下に、学習者から提起された写真の解釈を紹介する。

4―1　写真2から推測した内容と根拠

（1）鳥（10名）

・写真にはいくつもの白い点が移動している様子が映っていると思う。白い点の下には流れを示す黄色い線と黒い影がある。また上部に青いところはおそらく空か水面で白い鳥が飛んでいくところではないかと考えた。

（2）汚れた海、海（4名）。

・この写真を見て本能的に「気持ち悪い」感じ、そこからマイナスイメージもあったため、「水質汚濁」を表している写真ではないかと考えました。水色の中に黄色が混ざっているという異質なグラデーションからそう推測した。

（3）山火事（6名）

・真ん中の黄色いもやもやは火のように見え、上部に煙が上がっているように見えた。下部の白い点々は鳥に見えたので、火事から逃げている鳥の写真だと推測した。

（4）海の中、海の生き物（7名）

・境界不鮮明で、光が通っているので水の中。白いものの下に影ができるので高さがある。何かの海の生き物だと考えられる。

（5）羊の大移動（3名）

・草原のようなところで羊の大移動。白い粒状から見えた。

（6）鉱石を至近距離から撮影したものである。（1名）

・白、青、緑、黄色といった多様な色が光の反射によって見える。たしかに、海のようでもあるが、ここまで多様な色と揺らめきはないのではないだろう。

以上は学習者がワークシートに記入した内容例[6]であるが、その内容を表（1）に分類する。

表（1）　写真2から推測した内容と学習者観点

内容	根拠	学習者の観点	人数
鳥	砂浜、海、白い点が移動している様子と流れと示す黄い線と黒い影によって上の青いところは鳥	色彩	10名
海	青い部分は海で、緑や黄色い部分は水質汚濁	色彩と構図	4名
山火事	黄色いもやもやは火のように、上部は煙、下部は火事から逃げる鳥	色彩と構図	6名
海の中、海の生き物	境界不鮮明で濁っている水の中、海草の揺らめき、泡の発生が感じられた。	明暗	7名
羊の大移動	草原のようなところ、白い粒状	色彩	3名
鉱石	多様な色が光の反射	色彩	1名

学習者はその写真を見た瞬間に、「それは何?」と疑問を示すような反応が見受けられた。まず活動（2）の個人の観察段階では、写真を拡大して見せてほしいとの要求が出されたことから、写真の全体から細部にわたって細かく観察して推測する様子も見受けられた。ワークシートではほぼ全員自分の考えを書くことができた。表（1）と内容例で示したように学習者は写真を観察する観点が色彩、明暗と構図に分けられるが、同じ観点でも学習者に与えた感受が異なり、多様な読みが生まれている。

活動（3）のグループ討論では、活発に意見交換を行う様子であった。学習者は意外な様子や納得する様子などの反応を示していた。活動の中でお互いに考えを交換して、その根拠となる内容を他者と交流した。自分と異なる考えを耳にし、意外から納得まで受け止めて楽しみと喜びを示す反応が見られた。さらに、学習者が書いた内容から、一枚の写真で様々な情報を読み取ることができて、学習者自身の知識と照らし合わせて自分の考えを確立することができたと考えられる。

4―2　1枚の写真を選ぶ活動

第3部は3―1、3―2、3―3の3枚の写真を見て、3―4、

3―5、3―6、3―7、3―8の5枚の写真からその3枚と同じジャンルに分類できるような1枚を選んで、テーマと理由を考える活動である。学習者が選んだ写真と回答は以下のようにまとめられる。

写真3―4（1名）

・「土地開発」。1、2、3どれも自然がなかったとことに人の手が加わり、侵食されている写真だと感じた。3―4は後ろの高層マンション、手前の人と人の密集地帯で作る一方、広い面を作る矛盾的な人工物の侵食も感じた。

写真3―5（1名）

・大会（祭り）があるため色々な人が集まっているというテーマ。

写真3―6（13名）。

・「移動」。3―1～3、3―6はいずれも交通手段が写っている。ただ、3―2に礼拝する人々が写っていたり、3―6にバスの運転手が写っていたりすることで、ただの交通手段だけではないようである。そのため、「移動」とした。

・「今と昔」。3―6近代的なモチーフとも言えるものの、孤独な静かさがあり、近代的な写真とは一線を画していたから。道を歩けばおびただしい数の車、どこを見ても鮮やかすぎる色合いは心が落ち着かない。そんなとき、遠い故郷の新緑の香りを思い出す。窓から見える景色のどこかに今でもその面影を求めている。

写真3―7（3名）

・「新旧の融合」。未開発な平野と飛行機、現在も変わらない祈り（宗教）と電車、緑が残る土地と家が立ち並ぶ開発された土地が写真に収められおり、3―7では絵画の中の昔の人々と今を生きる人々が写真に収められていたので、変化と不変の融和を読み取ったため。

写真3―8（13名）

・「上から撮った風景（街）」。すべて上から見渡すようなアングルで撮られていたので、自然の風景ではなく街が関連している写真。

・「人の持たざる視点」がテーマであると感じた。どれも上方向から撮映されたように見える写真であるためだ。

第3部の活動は複数の写真を教材としたものであった。3枚の写真を観察して自分なりに共通点になる内容を読み取って、さらにテーマを明確にしたうえで、そのテーマに基づいて5枚の写真から1枚を選び出す活動となる。すなわち、写真の情報を読み取るだけではなく、読み取った内容を言葉として整理して、次の写真を選択した根拠として位置付けるというプロセスを経てからの第3部の活動となる。

第2部の活動は、1枚の写真に対してそれぞれの解釈を述べ合うことになる。写真は1枚しかないので、写真から読み取れる情報が限られていて、学習者は自身の知識と照らし合わせながら解釈していくが、大きなズレや違いがないので学習者の間で「納得」を示すような反応が多かった。

第3部の写真は複数あり、そこから得られる情報も多様なもの

となる。ワークシートにまとめられた内容からわかるように、同じ写真を選んだ学習者でも考えの視点が異なって、様々な角度から解釈をして読み解いていくことがわかる。そのような解釈や「読み解きのズレ」が生じたグループの活動では、「納得」だけではなく、「意外」の反応を示す学習者も多かった。本授業実践の目的の1つは「読み解きのズレ」によって豊かな学習を体験することである。第3部の活動では、学習者の反応から授業の効果を確かめることができた。そこで学習者が記入した内容を表（2）にまとめた。

表（2）　複数枚写真から考えた内容と学習者観点

写真	テーマ	根拠	学習者観察観点	人数
3―4	土地開発	1、2、3、は自然になかったことに人の手に加わり、3―4は矛盾な人工物の浸食	被写体と構図	1名
3―5	大会（祭り）	色々な人が集まっている	被写体	1名
3―6	都市と交通、交通手段と乗物、移動、今と昔	写真に写っている乗り物を注目。	被写体	13名
3―7	異物、自分の街、新旧の融合	写真の中で違和感と感じる要素が1点あり、昔と今を生きる人々、変化と不変を融和	被写体と構図	3名
3―8	沢山、人々の営み、人の暮らし、上から撮った風景（街）、視点、行列	人、飛行機、家、自然、人口	被写体	13名

表（1）と表（2）を比較してみると、写真を観察する際に、与えられた写真の枚数は学習者の写真観察の観点に影響を与えていることがわかる。表（1）では1枚の写真を観察するときに、写真の色彩、明暗や構図に写真の全体様子に大きく注目しているが、表（2）では複数の写真を比べながら観察する際に、写っている被写体を具体的に観察し分析していることがわかった。第2部の活動の課題は写真の内容を推測することであり、第3部の活動の課題は写真の内容を観察して分類するということである。学習者にとって細部も重要であるが全体を把握することが1枚の写真の内容を推測するための要点となっていることがわかった。その一方で観察して分類する活動は、細部にある被写体の状況を細かく把握する必要があると学習者が認識している。写真の観察は枚数と課題の内容によって学習者の観察の観点に大きな影響を与えている。

5　学習者の感想と今後の課題

授業総括の段階では、学習活動に対する学習者の感想を記述させた。感想の主な内容を以下に紹介する。なお、表現は原文のま

まである。

・絵図などを用いた授業の展開は春学期の講義でもあったように作文を創作することが主流であると思われるがその場合は学習者が情報を読み取りやすいものになるケースが多いため、今回のように一見何を表しているかわからない写真から得られること及びその根拠などについてじっくりと考えるというプロセスは新鮮な活動である。

・「よく観察してみましょう。」という言葉はよく小中高など今までの授業で聴いたことのあるものだったのですが、どのように観察することが「よく観察」することなのかという視点で写真（対象）をみることでわかることがあるのだと。

・みんなで同じ写真を見ても人によって見え方が違って、その違いをグループになって、意見交換したりするのが興味深かったです。そして、人の意見（自分と違う）のを聞いてもう一度見てみると、確かにそれに見えるし、違うものに見えてくるというのが不思議に思ったので、人による見え方の違いや感覚についてもっと調べて深めてみたいと思いました。

・人間は真っ先に既与知識と見た絵図を照らし合わせるというのは全くその通りだと思うが、その際にバイアスがかかる、先入観に固まってしまいかねない事について気になりました。

・一枚の写真をじっくりみる活動（写真1、2）と複数の写真の共通点を探す活動（写真3―1～8）に大きく別れており、前者ではミクロにみる視点、後者ではマクロにみる視点と変わって、頭の使い方が違うのがわかって面白かったです。

・写真をもとに自分の中の知識や経験と照らし合わせながら推察していく作業は高い洞察力と柔軟な発想力、グループでの協調性をためされるとても高度なプロセスだなと感じ、同時に普段自分がどれだけ何も考えずにものを「見」ているか改めて自覚することができました。

学習者の感想からいくつかのポイントを絞ることができる。まず教材化の観点に関しては、「よく観察」できる写真が適切である。学習者が「よく観察」することを促す写真は、筆者が写真を選択する際に重視していた「わかりにくさ」が機能していると考えられる。初見ではわかりにくい写真だからこそ細かく観察し、角度を変えてよく観察して、写真を観察する観点を立てながら他人と共有して再度観察するという行動につながる。これはまさしく能動的な学習につながる重要な行動である。学習者の能動的な姿勢を引き出す授業を目指すには、写真を選ぶ際に「見てわかる」のような内容ではなく、ある種の「わかりにくさ」が機能している。

次に、考えの共有に対しての意識も重要である。学習者の感想から出発して、グループ活動における内容の意見交換は自身の新たな発想を促す。自分の知識と照らし合わせて考えを深めることができたことは学習者の感想でも述べられていたが、それも今回の授業の重要な意義である。今回の授業実践の筆者の狙いの1つは写真を見て理解する時に多様な読みが生まれ、その読みを共有することによって学習者自身の考えを広げて深めていくということにある。学習者の感想の内容から、その狙いが果たされたと考

えられる。

その一方で、今回の授業実践では以下のような課題も確認できた。「わかりにくさ」を写真選択の要点として設定したことは、学習者の反応から効果があると見受けられるものの、一方では「難しい」という反応も見られたことは事実である。その「難しい」という反応の根拠としては、学習者が写真の観察に慣れてないことに関連していると考えられる。授業を進める中で、グループ活動が中断して沈黙が続いているグループを見かけた際には、筆者はすぐにスクリーンに映されている写真を再度提示するようにした。また提示する際に、角度を変えて写真を見せることにした。例えば、写真2を観察する際に、まず写真を縮小して全体の枠を見せてから、今度は写真を拡大して上部と下部の違いを認識させて、写真の構図を意識させるように工夫した。学習者の「難しい」と判断する1つの端的な反応は、話し合いの際に生ずる沈黙である。沈黙が見られたグループにはすぐに支援をするように心掛けた。ただし、読みを直接に学習者に提示することは避けて、写真を観察する観点を写真の見せ方で工夫し、読みのヒントとなるように配慮した。支援を受けた学習者は、すぐに言葉に変えて解釈につながることが観察できた。そのような支援を数回繰り返した結果、第3部の活動では「難しい」との声が改善された。今回の授業実践を通して、写真を読む授業を成立させるには教材の選択は極めて重要であるが、その「わかりにくさ」に特に注目したい。学習者の発達段階に応じて「わかりにくさ」を設けることは授業構想の主要な難点でもある。

さらに今回の授業時間は1時間30分の授業であったため、写真観察観点学習に十分な学習時間を確保できず、グループ討論の時間も不十分であった。授業の導入では5分ほど1枚の写真を使って写真観察の角度について説明したが、その内容を改善してより効果が確認できるようにしたい。そして今後は写真観察の観点の学習を十分に取り入れつつ、討論時間をさらに確保して考えを深められるような授業設計を目指したいと思う。

今回の授業実践では写真を使って「読み解きのズレ」が生じるには「わかりにくさ」が必要であることが明らかになったが、その「わかりにくさ」を学習者の活動でどのように解消するかについてはまだ十分な言及ができていない。今後は、学習者の「わかりにくさ」から「わかる」までのプロセスをより明確に解明する必要があると考えている。

6　おわりに

本稿では、国語科教育に写真を教材として取り入れることを意図した実践を紹介した。写真を「読むこと」の対象として扱い、多様な読みが生まれるように「読み解きのズレ」が生じる能動的な学習活動を目指した。授業構想の段階で教材としての写真選択の重要性と困難を改めて認識した。今回の授業の構想に際して、筆者はプロのデザイナーの意見を参考にしながら教材としての写真の取捨選択をしたが、授業者の写真への理解、解釈や評価などの専門性が問われることは事実である。さらに、授業を行う際に、十分な授業時間を配当することは、学習者の考えの幅と深みにつ

ながっている。今回の授業実践では課題が多く確認されたが、今後の研究に繋ぐものとして位置付けをしたい。

注

1　羽田潤「写真を扱った授業実践ー静止画を読む観点を活用した言語活動ー」『ことばの授業づくりハンドブック　メディア・リテラシーの教育・理論と実践の歩み・』浜本純逸【監修】奥泉香【編】渓水社　２０１５年　ｐ91～ｐ92

2　鹿内信善『協同学習ツールのつくり方いかし方ー看図アプローチで育てる学びの力』ナカニシヤ出版　２０１５年　ｐ16

3　ナショナルジオグラフィック社が主催する旅写真のコンテストである。世界中の写真家から写真が寄せられ、最も有名と大規模な写真コンテストとも呼ばれている。

4　鹿内信善『協同学習ツールのつくり方いかし方ー看図アプローチで育てる学びの力』ナカニシヤ出版　２０１５年　ｐ60

5　Ben Christopher Nitta：武蔵野美術大学出身で隈研吾建築都市設計事務所に勤務。建築デザイン業務の一環として設計、写真やグラフィック編集もプロフェッショナルにこなしている。

6　本稿の中で例示した学習者の内容例、回答例、感想例などはすべて授業後に回収したワークシートによる内容である。以下同様。

参考文献

鹿内信善『やる気をひきだす看図作文の授業　創造的「読み書き」の理論と実践』春風社　２００３年

S．I．ハヤカワ　大久保忠利訳『思考と行動における言語』岩波書店　２００５年

渡辺雅子『納得の構造　日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社　２０１３年

（早稲田大学大学院　院生）